

2. 研究 成 果

設定課題 1.

群れの統合機構に関する研究

幸島群におけるハナレオスのinteractionの 分析

菅原 和孝(北大・文)

筆者は、すでに幸島のハナレオスについてその社会関係および社会的出会いの構造について報告したが(菅原, 1975; 1980), 今回はとくに、交尾期に群れに接近, 侵入したハナレオスと群れの成員とが混在する「密集空間」の生成と崩壊のダイナミクスに焦点を絞った。調査は1980年1月16日~2月28日まで行なわれた。幸島には、この時点で満9歳以上のオス20頭が棲息していた。前回調査した1978年交尾期と比較して顕著な変化は次の4点である。1) 1974年より一貫してハナレオスの順位序列の上層に位置していた2頭のオス, ゴリ(12歳)とザシン(13歳)が島外へ離脱していた。2) 10年以上ハナレオスの順位序列の最上層にあったイカ(22歳)は老齢化に伴って劣位の表出を頻繁にみせながら、群れと行動を共にするようになっていく。3) 1978年度には群れに対して著しく敵対的にふるまっていたゲシ(18歳)は、群れの成員たちによく許容されるようになっている。4) 現在、ハナレオスの順位序列の頂点にいと推測されるノスリ(14歳)はマキの家系を中心とした分裂群と完全に行動を共にしている。このようなそれぞれのオスたちの社会的位置の多様な変遷過程は、島に閉じこめられた孤立群のオスの生活史の特質を把握するうえで、貴重な資料となりうる。

「密集空間」の動態に関する資料は、現在分析中なので、方法論上の見通しを述べるにとどめる。a) 「平和的」にみえる多数の個体の近接状況の中にも agonistic interaction として顕現しない競合関係が想定される。b) このような潜在的競合を分析するうえで有効なのは個体間の優劣関係ではなく Stammbach (1979)の提起した Dyad の優劣度の概念かもしれない。c) social interaction として現われる以前の、社会的立場における個体の他、個体に対する近接指向性を分析する

手掛りとして身体定位を用いることができる。

最後に、筆者の調査中に突然、逝去された磯崎正富氏の御冥福を心からお祈りする。筆者にとって、氏と焼酎を飲みかわした幾多の夜こそが最も濃密な「島」の記憶を形づくっている。

嵐山における第2次分裂後の、新群の社会構造の変化および群間関係

高畑由起夫(京大・理)

中田千佳夫(岩田山自然遊園地)

1978年2月以降、嵐山B群の一部に顕著な sub-grouping が認められ、4月に分裂が完成したものと見なされ、嵐山C群と名付けられた。この群れは分裂の課程で相当数が捕獲され、4月の時点での個体数は12頭であった。

分裂の際の特徴として、Ⅰ)メンバーは分裂前5番目の家系順位にあった Kusha の血縁集団のほぼ全員と、血縁関係にない subadult, male 2頭(9才と5才)だった。なお、Kushaの血縁集団は、1970~1976年にかけて劣位であった Glance の血縁集団に順位を逆転されている。Ⅱ) Kusha のコドモのうち、K-688(当時15歳)と K-658(18歳)は、それぞれ第2位および第5位のオスであったが、以前から近接関係やグルーミングが見られなかった。分裂にあたり、彼らは血縁集団のメスに追従せず(というより、この分裂に対しほとんど関係せず)、B群にとどまった。

Ⅲ) 1978年3月に、B群の一部とC群がたびたび衝突したが、C群はそのたびに岩田山のエサ場周辺より追い出された。5月以降は、エサ場より北東の保津川右岸の観光用道路の付近に45日とどまった。

これらの現象は、血縁関係の判明している他の群れでの分裂の例(嵐山群の第1次分裂〔Koyama, 1970〕、勝山群の分裂〔藤井, 1974〕)でも、ほぼ共通している。

一方、分裂群に adult male が参加せず、分裂初期には当時27才と推定された Kusha が明らかにリーダーシップをとり、彼女の捕獲後は、その娘である K-69♀がリーダーシップをとったことは、adult male がいなくとも、メスでも十分リーダーとしての role をはたす能力があることを示している。ただし、彼らの間の血縁関係に基づく、